

欠

故に色の白いばかりが美の要素と云ふことは出来ぬ。元來顔の色は表情の變化に伴つて變るものである。嬉しい時は頬にローズの淡色がさす。耽ちらふ時には満面に紅葉の濃き色を示す。怒れる時には額に靜脈が漲つて赤黒い顔色となる。驚く時は急に顔面の血管が收縮して蒼白になる。得意の人を見よ、失意の人を見よ、順境にあつて威力を誇る人を見よ、逆境に沈淪して零落を呻吟する人を見よ、そして其の間に如何ばかり顔色の差異あるかを見よ。然しながら色は各人に相應して與へられてゐる。嬰兒には嬰兒の、軍人には軍人の、男には男の、そして女には女の色が賦與されてゐる。古歌に

もろとも一味の雨はかゝれども

柳はみどり花はくれなる

と云ふのがあるが、柳はみどりにふさはしい故に長い緑の枝を垂れ、花は紅に適して居るが爲めに枝頭に響をかざすのである。天に私なく、自然は公平である。其の身その色に相當して居るものであるから、強いて頬紅で胡麻化したり、寧ろ醜い程の化粧をしてカモフラージュするにも及ばぬのである。

梅が香を櫻の花に匂はせて

柳の枝に咲かせてしがな

と云ふ古歌があるが、随分悠遠しい歌である。それは櫻の花が梅の芳香を放つて、なよなよと垂れた柳條に咲き盛つて居つたら、詠へ向きではあり、理想的の美しさであるであらうが、梅には梅の特色があり、

櫻には櫻の長所があり、そして柳には柳の持ち前がある。それが個々の色をにじみ出してゐるのが尊いのである。強いてそれを混ぜ合せ雑色とするには當らないでは無いか。人がおのれの本來の美に満足しないので、不自然的に他を模擬しやうとするのも、要するに此の欲深な歌のやうなものではあるまいか。

美は諸筋の活動にもある。諸筋が圓滑に、敏捷に、輕快に、迅速に、精神の動きを傳へて活動すればする程、表情は明確になる。表情が明確になれば美の光が一層に發揮される。おしろいを塗りこくつた厚化粧では、此の表情が發揮されぬ。諸筋の繊細な運動がすべて隠されてしまふからである。

ラスキンと云ふ有名な學者がある。その學者の言葉に「色の價ひは評價し難い程に貴いものである」と云ふことがあるが、私共も實に然りと思ふのである。同じ學者は又左のやうに云つてゐる。

『蒼空から緑の色を去り、日光から黄金の色を去り、木の葉から靑藍の色を去り、人のいのちの血潮から眞紅の色を去り、頬からローズの色を去り、瞳孔から黒の色を去り、髪から澤なす綠色を去れば、世界は果してどんなになるであらうか。たとへ須叟の間でも無色の白い人間が、無色の世界に住まふの見たらば、誰しも色に負ふところの大いになると、色の價ひの貴いことが理解されるであらう。自然が人に賦與したる賜物のうちでも、色は最も神聖な、最も清淨な、且つ最も神嚴なものである。……されば最も純潔なる、且つ最も森嚴なる心の人は、色を愛すること最も多きものである』

と。都鄙文野の別ちなく、又老若男女を論ぜず、凡そ人として美を愛し、美を好まぬものは無い。只美の

標準や嗜好が人により、時代によりて多少差異あるばかりである。而して色は美に於て缺く可からざる唯一の重大なる要素である。ラスキンの云つたやうに、世界のすべてに色が無くて、只一樣に無色澄明白色であつたならば、何處に美を求め、美を感じずべくもないであらう。眼に美しいと見る色は、心に大なる愉悅と、慰藉と、満足とを與へるものである。花を見て楽しむのは、獨り眼を喜ばすためではなく、深く心を慰むるためである。世間は廣くして住む人は多しといへども、何處にか枝頭の花を見て心に怒りを引き起すものがあらう。花が笑つてゐると笑ふ。笑つてゐるのでは無いが、之を笑つてゐると感ずるのは、見る人の心が樂しまされる故である。畫家はいろいろの材料を取り合せていろいろの色素をつくり、いろいろの美しい色彩を紙上に現はし出さうとする。そして之を人の眼に訴へ、心に訴へて美感を起さしめようとする。美しき色を得んが爲めには、多くの人の憂き身をやつすところである。が、人の努力によりて造り出した色は、要するに裝飾の色 Schmuckfarbe であり、模倣の色 Imitationsfarbe であり、人工の色 Kunstliche Farbe であつて、眞の天然色 Natürliche Farbe に比すれば甚だしい遜色がある。畫家が如何に靈妙な彩筆を振つたところで、あの空の色、雲の色、日の色、草木禽獸萬象の色を、其の儘に寫し出すことは至難である。否寧ろ不能である。たとへ似通つた色は出來ても、彼の如き精氣が無く、生命が無く、従つて彼の如き微妙靈犀なる動きが無い。従つて生物の美の色と無生物の美の色とは比較すべくもない遠い隔りがあり、美の程度に天地霄壤の差異がある。それで人體の美は其の健康色に於て見られると云ふ結論

に到達する。目鼻の配置がたとへ理想的では無く、頭顱顔面の格好がよしや満点でないとしても、それが健康に恵まれてゐて、健康なる天然色が遺憾なく溢れて居れば、何が無しに人を魅するの力、人に愈ばるの威を備へて居るものである。その上その人の精神が至純高尚であれば、おのづからなる表情の美は加つて、健康の美は茲に一段の光輝を放つものである。然るに世人が此の健康色の美、天然の美を愛することをせずして、裝飾の美、人工の美を熱求するのは、誠や冠履を顛倒し本末を誤まれるものと稱すべきである。

精神が美しければ外觀も美しくなるとは千古の眞理で、動かすことの出来ないものである。美術家や解剖學者の言によれば、人の顔は左右兩半が全く均等でない。鼻は顔の中央に位せず、多少何れの方へか歪んでゐる。そして左右の眼も、耳も其の大小形狀を異にしてゐるさうである。然しながら心に高尚なる希望を懷き、胸裏に至純なる理想を有し、身に他を裨益せんとする計畫を實行する人には、是等の不均齊は何等の美を損せぬのである。

哲學者エマーソンの言を藉りて言へば、よし鼻が曲つて居ようが、脚が切斷されて居らうが、そんな事には頓着は無い。『美は我等の手の中にある』“Beauty lies in our own hand” 要は心を健全に、平和に純潔高尚にして、毫も悪念邪想に迷はされず、専ら正道を踏んで、然るのち之にふさはしい外貌を得よと云ふことである。

外觀は内心を映す鏡である。下劣野卑なる思想感情もうつれば高貴純良なる思想感情も映る。願はくば私共は後者をうつして、其の各の外貌に天然美、健康美純潔を得たいものである。要するに私共は外貌の美を欲するならば、先づ精神の美から、次に健康の美から出發し、徒に區々たる裝飾の美や、人工の美に走りたくないと思ふのである。彼のミランの殿堂は世界の驚異と稱せられる程で、絶美なる結構裝飾を具へ、其の中には五千有餘の大理石像が藏置されて居ると云ふことである。又彼のコロンの堂宇は、世界に於ける最も完全なる美殿と讃へられ、その絶大なる塔宇と、ゴシック式構造建築、共に人目を驚動せしむるさうである。世界には人類の手によつて成つたもので、自然の妙に迫るものが頗る多い。然しながら思ひをめぐらして人體と云へる不思議な家の構造と、其の美とに就て考へれば、ミランの殿堂も何であらうコロンの伽藍も何であらう、其の外無數の人工に成つたものも亦何等の價だも無いであらう。

昭和十四年五月二十日 印刷
昭和十四年五月廿一日 發行

不 許
複 製

『人のからだ』 外地定價一圓七十六錢
(定價一圓六十錢)

著 者 渡 邊 房 吉
櫻葉市中區四丁目一ノ十一

發行者 植 村 友 彦
東京市目黒區下目黒二ノ三七二

印刷者 並 木 順 作
東京市底布區新廣尾町三ノ八七

東京市目黒區下目黒二ノ三七二

發行所

第一出版社

電話大崎四三二九番
振替東京二一七三三番

48
150

終